

現代アメリカ先住民文学と移動

Contemporary Native American Literature and Traveling

室 淳子

Junko Muro

I はじめに

アメリカ先住民による文学は、1969年にN. スコット・ママデイ (N. Scott Momaday, 1934-) の小説『夜明けの家 (House Made of Dawn)』(1968) がピューリッツァー賞を受賞したことを皮切りにして、後続の多くの作家により数多くの作品が生み出されてきた。代表的な作家としては、レスリー・マーモン・シルコウ (Leslie Marmon Silko, 1948-)、ジェイムズ・ウェルチ (James Welch, 1940-2003)、ジェラルド・ヴィズナー (Gerald Vizenor, 1934-)、ルイズ・アードリック (Louise Erdrich, 1954-)、ジョイ・ハルジョー (Joy Harjo, 1951-)、シャーマン・アレクシー (Sherman Alexie, 1966-) などの名がよく知られている。本稿は、これらの現代アメリカ先住民文学のなかのいくつかの作品に例を求めながら、アメリカ先住民と移動について次のような考察を行っていきたい。1) 先住民文学において描かれる移動が、先住民の表象、歴史、社会的位置づけ、現代のグローバル社会における文化状況とどのように関係し、先住民の現在を描くものであるのか。2) 現代の作品がさらに現代的な先住民の移動をどのように描いているのか。3) 移動の対抗概念の家郷 (ホーム) として、先住民居留地 (リザベーション) やインディアン・テリトリーがどのように位置づけしなおされるのか。

最初に、移動の問題を考えるにあたり、その移動が意味するのが、ある場所から場所への身体的移動ばかりでなく、文化の移動や、概念上の移動を含んでいることを隆起しておきたい。多くは1990年代以降の近年の文化理論において、場所をめぐる問題は盛んに議論され、文化理論家たちが、旅(travel)、位置(location)、領域(territory)、場所(place)といった用語を駆使して、現代の世界的な文化状況を説明してきた¹。移民の大規模な移動によるディアスポラ体験や異文化の混淆、メディアや交通手段の発達、従来考えられてきた固定的な文化概念をゆり動かし、文化と文化の間に生み出される文化や、文化自体がもつ流動性についての思想を必然のものとして捉えはじめたのだ。

先住民はしばしば移民と対極の存在として捉えられ、安定性や土着性といった概念と関連づけられている。だが、実際に先住民の歴史に伴った身体的・文化的な「移動」は膨大なものであり、先住民作家によるさまざまな描写は、必ずしも安定しない場所意識や、移動の必然と情熱、移動がもたらす新たな文化の動きを伝えており、現代の場所の問題意識からかけ離れるものではない。もっとも、先住民には固定的な連想がつきまといがちである。ステレオタイプ的なインディアン像は依然として支配的であり、先住、あるいは、ネイティヴという言葉から連想される土着性や伝統性の強制、部族を単位とする人類学的分類、先住民居留地や先住民居住区域への政治的・社会的囲い込み、先住民と貧困や悲劇性との同一視などは、日常的な語りのなかにも頻繁に見られるものである。従来文学作品や歴史記述を含め、数々の絵画や芸術写真、映画、コマーシャル、ガイドブック、パンフレット、絵葉書、Tシャツ、土産物に表象されるおなじみのインディアン像は、野性味を帯びて、アメリカの大自然のなかに一人立ちずさみ、時には馬を駆り、時には古来の知恵を受け継ぐ伝統的な儀式をとりしきり、時には色彩豊かな踊りを舞う姿として、多くの人々の記憶のなかに固定されているといえるのではないだろうか。このお決まりのイメージには、実際に先住民たちが経験してきた土地の剥奪や先住民居留地への強制移住、都市への再移住にみられる

ような移動の歴史とも、ヨーロッパとの接触以降の文化の変容や異文化との混雑や現代の消費主義的な物質文化や多文化性とも、車や飛行機などの交通手段や電話やインターネットなどの通信手段とも、無縁であるかのように映るのではないだろうか。このようなイメージに対して、先住民文学に描かれる移動がどのように裏をかき、ゆり動かそうと試みるのか、以下にみていきたい。

II 先住民作家と場所意識

文化人類学者のジェイムズ・クリフォード (James Clifford) は、1992年に開催されたカルチュラル・スタディーズの学会において「旅する文化 (Traveling Cultures)」と題する講演を行い、従来の文化人類学における「文化」の認識をゆり動かすような、移動の文化と、文化の移動について述べている。従来の固定的な「文化」概念を捉えなおすためのひとつのパラダイムとして彼が取り上げたのは、スクワントという名のアメリカ先住民であり、その人物が、1620年にマサチューセッツ州のプリマスでピルグリム・ファーザーたちの到着を迎えたこと、彼がヨーロッパから戻ってきたばかりであり、ガイド兼通訳として非常に流暢な英語を話したことについて触れている。多くの歴史記述は、新大陸の発見と探索、新天地を求めてのアメリカへのルートについて多くを語っているものの、その逆方向の移動や、航海や探検に同行したはずのガイドや通訳の存在についてはほとんど記録しておらず、未踏の地アメリカへのヨーロッパ文明の到来という歴史的な図式は、ヨーロッパ文化の豊かさとは対照的に、「言葉」を話すことができず、「文化」をもたないアメリカの無知さを前提とし、スクワントのような両者の文化の間に立った者の存在、有能な「原住民」の存在を見えなくさせている。コロンブスの新大陸到着が1492年であるならば、その128年後に異文化経験の豊かな「言葉」の話せる「原住民」がいたとしても、本来不思議はないのであろうが。

クリフォードの指摘は歴史観を覆す上で面白いものであるが、この流暢な英語使いを行い、ヨーロッパ人を出迎えるスクワントの姿が、先住民作家た

ちの作品にちらほら現われるのも興味深い。ピルグリム・ファーザーズを出迎えたスクワントのように、ジェラルド・ヴィズナーの『コロンプスの息子たち (*The Heirs of Columbus*)』(1991)では、アメリカに辿り着いたコロンプスをアメリカ先住民たちが「お帰りなさい」と出迎える。ユーモアの多いヴィズナーの作品ゆえ、何でもそのコロンプスはかつてベーリング海峡を逆に上がり、アメリカ大陸からユーラシア大陸へと向かった祖先の血を引く混血であるらしく、新大陸の発見ではなく、めぐりめぐって故郷に帰ってきたということだ。そのようにしてヴィズナーは、アメリカ先住民がユーラシア大陸からベーリング海峡を通過してアメリカに来たとする定説を裏返すのだが、それが単なるフィクションにすぎないと証明することは、本当に可能であるだろうか²。自身が混血であるヴィズナーは、混血の主人公を多く登場させ、自らの経験をふまえて中国や日本を設定にした作品を描いているが、そのことでアメリカ先住民文学の「場所」の固定化を避け、現実の多くの身体的、文化的移動を描き出そうとしているようだ。ヴィズナーの初期の作品『ベアハート』(*Bearheart*, 1978)においては、政府の役人により土地を追われ、アメリカ中を旅する先住民の一行が描かれ、『広島ブギ』(*Hiroshima Bugi*, 2003)では、終戦後に生まれたアニシナベとアイヌの混血の主人公が活躍する。

スクワントの流暢な英語使いはまた、レスリー・マーモン・シルコウの『儀式 (*Ceremony*)』(1977)に登場する「きれいな英語」(*Ceremony* 117)を話す混血のメディシン・マン(呪術師)オールド・ベトニーをも彷彿とさせる。『儀式』では、第二次世界大戦時のフィリピンのジャングルにおいて日本兵と交戦する先住民の主人公テイヨたちの姿が描かれ、原爆という負の共通項によって、広島、長崎とアメリカ南西部プエブロとの結びつきが描きだされるが、その世界的な枠組みのなかで主人公テイヨが抱える現代的な苦悩を紐解くきっかけを作るのは、このオールド・ベトニーであり、昔ながらのメディシン・マンではないことが興味深い。作品は、オールド・ベトニーの祖母がメキシコ女性であったことを述べ、オールド・ベトニーがテイヨと同じ混血であったことを明らかにするが、彼のそうした民族的、文化的越境性を示すよ

うに、彼を文字通り多くの移動を行った人物として描き出している。オールド・ベトニーは、サンタフェ鉄道の最上の乗客であり、子供のときにカリフォルニアの学校に行くのに鉄道を利用して以来、1903年にシカゴ、1905年にミズーリー州のセントルイスを旅し、セントルイスやシアトル、ニューヨーク、オークランドなど各地の電話帳を収集しているとあるのだ（*Ceremony* 120-22）。

このように、先住民文学のいくつかの作品は、特定の場所への固定化や既存の場所の概念に挑戦するかのような描写をしばしば行っているが、もう一つの例を、メキシコ、合衆国、カナダを隔てる国境の存在を疑問視する姿勢にも見ることができるかもしれない³。トーマス・キング（Thomas King, 1943-）は、アメリカ南部のチェロキー出身であるが、カナダの先住民たちとの交流を通して主な活動の拠点をカナダにおき、部族や地理上の位置によって先住民が区別され、定義づけされることを好まない。次回作について尋ねられたキングは、「文化的に特定化された地域からは完全に遠ざかる」ことを考えており、先住民が、「たとえば、部族によって特定されるものではなく、実際には地理的な地域によってさえも特定されない」ことを述べている（Vizenor 1994, 174）。先述のシルコウの『死者の暦書』（*The Almanac of the Dead*）では、先住民にとってのアメリカとメキシコの国境の存在の意味が問われ、国境を取ってまたがる作品展開が行われる。先住民文学の批評家であるアーノルド・クルパット（Arnold Krupat）は、このシルコウの作品が、北から南、南から北に向かう、南北アメリカ先住民の中心部に向けた移動の線を「私たちのアメリカ」を語る物語の中心に置き、アメリカの西部開拓史が示す東から西に向けたフロンティアの拡大と文明化の概念を覆そうとしていると述べている（Krupat 1996, 51-52）。

Ⅲ アメリカ先住民の移動の歴史と作家たちの移動性の主張

さて、アメリカ先住民の歴史のなかで、実際にはどのような身体的、文化的移動が伴ってきたのであろうか。ポカホントス（c. 1595-1617）にまつわる

伝説は有名であるが、植民地建設の初期の段階において、ヨーロッパ人に接触した例は少なくなく、のちに現地ガイドや通訳、毛皮貿易の取引者として、アメリカ中をめぐり、新世界の状況を報告するための「標本」や労働者として、ヨーロッパへと渡った先住民の例も決して少なくはないようだ。興行用の「見世物」としての巡業もめずらしいものではなく、20世紀はじめに人類学者のジョン・ナイハード (John G. Neihardt) が口述筆記によって記録したブラック・エルク (Black Elk, 1863-1950) の伝記によれば、彼がワイルド・ウェスト・ショウの一行に付随して、1886年から1889年にかけて、オマハ、シカゴ、ニューヨーク、ロンドン、マンチェスター、パリ、ドイツへと旅したことが知らされている (Neihardt 214-228)。アメリカ連邦政府は、アメリカ先住民を故郷の土地から駆りたて、居留地への強制移住を強行したが、なかでも「涙の道」(Trail of Tears, 1838-39) として知られる、チェロキーの人々らアメリカ南部の先住民の大規模な強制移住は、現在の居留地の所在を示す地図の南東部に大きく不自然な空白部を作り出すほどである。早い時期から入植者たちとの衝突と文化喪失を経験した北西部や南東部地域の先住民にとっては、土地や自然からの切断と西洋文明化の推進は必然であり、その一方で、自然や大地のイメージと強く結びついたインディアン像が残され続けてきたことは皮肉であるともいえるだろう。

さらに、先住民を西洋社会に順応させるためにとられた同化政策は、先住民の子供たちの多くを家族やコミュニティーから遠ざけ、寄宿学校へと追いやることになる。1920年代に行われた都市への再移住政策はまた、多くの先住民を労働者として都市に送り、生活の手段を求めての出稼ぎが頻繁に行われるようになってくる。ヴィズナーの父親は、1930年代に、ミネソタ州にあるホワイト・アース居留地からミネアポリスに家族とともに移住したそうだが、ヴィズナーは自身の父を「先住民移住者 (native emigrant)」と名づけ、「移動をする先住民の話はよくあるものである」と述べている (Vizenor 1998, 49)。ヴィズナーは、作家ルイス・オーウェンス (Louis Owens, 1948-2002) の例も引き、オーウェンスが子供時代に頻繁に引っ越しをし、2年以上

は同じ家に暮らしたことがなかったこと、時には家賃が滞ったり、新しい仕事の要請があったりするために、数ヶ月滞在するだけのこともあったことを記している (Vizenor 1998, 55; Owens 1996, 288)。オーウェンス自身もまた母方の祖母について述べており、祖母が住む場所を頻繁に変え、「アメリカの様々な場所から」母に絵葉書を送ってきたことを記している。「ボストン、アルバカーキ、ララミー、シアトル、サンディエゴ、トゥルサ、リトルロック、ラスベガス [……] まるでかつての強制移住の使命が祖母に種を植えつけ、祖母の一人息子と同じに、移動をしたいという衝動が祖母を駆り立てていたかのようなだった」と (Owens 1998, 178)。興味深いのは、オーウェンスが家族写真のほとんどに車が映っていることを指摘し、家族の移動への情熱が、先住民がもともと持っている移動の習性 (indigenous motion) (Owens 1998, 164) と大きく関係しているが、ある側面では非常にアメリカ的なもの、「ルーツや、家族、コミュニティ、あるいは土地自体に対する責任から免れようとする、アメリカン・ドリーム」 (Owens 1998, 161-62) を示していると述べていることだ。ヴィズナーは、「トランスモーション (transmotion)」 (Vizenor 1998, 15 *et al.*) という造語を用いて、狩猟採集民の非定住型の生活様式や口承物語におけるトリックスターが移動をしつづけていることなどを指摘し、先住民が生きるために場所を変え、常に移動をしてきたこと、現在の旅行、出張、転勤を含め、常に場所を変えて移動をする必然性や可能性があるといういわば当然の事実を、先住民のもつイメージに対抗させる形で述べている⁴。

IV ジェラルド・ヴィズナーの『悼む者』

ここでさらに、現代先住民文学の作品を具体的に2作取り上げてみたい。ジェラルド・ヴィズナーの『悼む者 (Griever: An American Monkey King in China)』 (1987) とルイーザ・アードリックの『アンテロープ・ワイフ (The Antelope Wife)』 (1998) はいずれも先住民文学のなかでは比較的新しい作品であり、それぞれの作家が評価を受けた初期の作品に比べれば議論の数も少

なく、完成度の高いものであるとはいえないが、移動のテーマを考えるにあたっては、興味深い作品であるようだ。

これまでに見てきたように、固定化された先住民のイメージや土地への固着化を嫌い、先住民がもつ移動性をしきりに議論するヴィズナーは、登場人物たちにアメリカ中を旅させるだけではなく、アメリカ先住民を「アメリカ」から切り離し、世界中を旅させようとしているようだ。父親の代から居留地を離れ、幼い時から都市生活を行ったヴィズナー自身、多くの移動を経験しており、米軍への入隊後の18歳のときに戦後（1952-55）の日本を訪れ、「アニシナベのドリーム・ソングのイメージ」（Vizenor and Lee 66）をもつ俳句から、文学への憧憬を強めたと語っている。以来、東洋文学を専攻したヴィズナーは、自ら俳句集も出版するが、その後、訪れた中国で、西遊記にアニシナベの伝統との関連を見出し、『悼む者』の着想を得たということだ。

『悼む者』が数多くの先住民文学のなかで特異であるのはやはり、先住民の主人公がアメリカを離れて中国を訪れるという設定であり、アメリカ先住民の文化と中国の文化との接点を描くことで、先住民の領域的な固定化に挑戦しようとする点であると思われる。ヴィズナーは、「インディアン」（彼の議論のなかでは *indian* と小文字の斜体で綴られる）という存在は、西洋が生み出した「先住民」（彼の議論においては *natives* と表記される）不在のシミュレーションにすぎないと述べ（Vizenor 1998, 146）、「インディアン」像を切り崩すための試みを小説や評論を通して行っているが、『悼む者』においても、固定的なイメージをもつ「インディアン」を盛んに移動させ、「先住民」の移動性と可動性、文化横断性を示そうとする。

『悼む者』は、旅、移動、解放、飛翔といった表現にあふれ、主人公のグリーバー・ド・ホーカス（悼み＝騙す者）が、飛行機で中国に到着する場面に始まり、ウルトラ・ライトで逃亡する場面で終わる。乗り物が頻繁に登場し、グリーバーは天津の街を、バスや汽車、自転車を使って動き回り、ガイドブックや中国語のフレーズブックを携えた外国人教師らとともに汽車に乗って唐山を観光に訪れる。グリーバーはまた、相思鳥を鳥かごから逃がし、

鶏を市場から逃がし、高級レストランのメニューを紙飛行機にして飛ばし、小学生時代に解剖実験から蛙を逃がしたエピソードももっている。マテオ・リッチと名付けられた雄鶏は、食用にされる寸前に救い出され、中国を共に脱出する。ヴィズナーは、「トーテムの飛翔のシンボルが、先住民の生命力を表しており、烏や、鷺、鶏などの鳥が、自分の作品のほとんどに登場する」(Vizenor and Lee 117) と語っているが、中国の路地を舞台に繰り広げられる飛翔劇は世俗的ながらも、一定の場所に囲われている者を解放させるという思想にあふれているといえるだろう。

注目したいのは、主人公グリーバーが移動性と逸脱性を持つ存在であるということだ。混血としての自分の存在を常に意識におくヴィズナーは、彼の作品に混血の主人公を絶えず登場させるが、グリーバーも例外でなく、少年時代に「1つの文化に落ち着くことのできない、2つのアイデンティティによる人種的な混乱」(Griever 49) をきたした生徒と見なされたと描写されている。グリーバーの移動性を体現するかのように、彼の父親はユニバーサル・ホーカス・クラウンと名づけられた幌馬車で居留地を一時的に訪れたジブシーだと示され、グリーバーの家族が連邦政府による命令により移住を余儀なくされたことも仄めかされる。そうした経験から生み出されるグリーバーの移住性と、1つの場所に固定されることへの嫌悪感は、身分証明書の作成や音声テープの録音、写真撮影などのすべての拒否に現れ、それらは文書や報告書に記録され、1つの文化や地域に固定され、政策によって翻弄されてきた先住民の経験と嫌悪を表わすかのようなものである。グリーバーは、名を尋ねられる度に異なる返事をし、顔に孫悟空の化粧を施して身分証明書を作り、手紙の署名も「天津のグリーバー」(Griever 18) から「リンドバーグ・グリーバー」(Griever 235) へと変えていく。

『悼む者』では、アメリカ先住民と中国人との身体的な特徴と、風景や、文化的な類似性がしばしば描写されるが⁵⁵、文化大革命以降の中国共産主義社会の社会体制と伝統文化の抑制に先住民居留地の社会状況と規制が重ね合わされ、下層階級や混血児、売春婦、死刑囚、航空機事故や地震災害の犠牲者に

グリーバーの視線が向けられている。グリーバーは、社会の不条理を嘆いて害怕穴に向かって叫び声をあげ、規則や規制を覆そうと中国国歌の演奏をアメリカ国歌に変え、「貧者と抑圧者の味方」(Griever 154)の孫悟空よろしく政治犯を逃し、死刑制度に反対し、真剣に英語を学ぼうとする学生をからかい、市長の挨拶を無視し、退廃的な外国文化の象徴であるハードロックをかけるなど、さまざまな抵抗を行う。

だが興味深いのは、グリーバーがあくまでもアメリカ出身の猿王として描かれていることであり、グリーバー自身、中国社会に対する経済的、文化的な優位からは決して逃れておらず、グリーバーが中国の「従兄弟たち」にいかにか親近感を抱いたとしても、彼は「外国人」(Griever 35; 75)であり、グリーバーの解放の試みも、単なるおせっかいな、役立たずに転じてしまうことだ。このことは、最も典型的には、市場から鶏を解放しようとした滑稽な場面に表れている。グリーバーは、前払いの給料から紙幣を広げて出し、「魚や豚よりも高価で、一般の人々が特別な祝い事でなければ買わないような」(Griever 40) 鶏を逃すが、その様子は、奇妙な外国人を見に集まった観客の前での一人芝居であり、観光用のフレーズブックでは、アメリカ的な解放の概念を伝えることができない。

「ジャック、解放っていうのを訳してくれないか？」と、グリーバーは、偉そうな口調でいった。彼はブロンドの青年の方を見ずに、聴衆の方を向いて話した。

「解放？」

「そうだ、解放だ。1語でいい。」

「概念を説明するの？」

「いや、言葉でいい。僕らが概念みたいなものなんだから。」

[……]

「自由。」とジャックがいった。

「何だって？」

「自由、フリーの意味だよ。」

「何でみんな笑っているんだよ？」

「待てよ。胡麻油の意味に聞こえちゃったんだな。」

(Griever 43; 45)

グリーバーは、自らが否定しようとも、外国に旅をすることのできる「アメリカ人教師」としての特権的な位置にあり、外国人用の1等車両に乗ることも、正式な晩餐会に招待されることもでき、同僚や観光ガイドの表面的な情報を批判しつつも、旅行者的な関心をもつ一時的な滞在者にすぎず、英語話者や通訳を介してでなければ人々の声を聴くことができないコミュニケーションの限界と、アメリカ性を身につけた現代アメリカの猿王という限界をももって描かれる。『悼む者』は、旅をする先住民の姿を描くことで、固定されて捉えられてきた先住民のもつ移動性や可動性、他文化との文化的・歴史的・社会的な共通性を描き出すが、同時にそこにある限界をも描くことで、現代の社会のなかでアメリカ先住民が置かれている複雑な位置づけをも示しているといえるだろう。

V ルイズ・アードリックの『アンテロープ・ワイフ』

次にルイズ・アードリックの『アンテロープ・ワイフ』について考察を行いたい。『アンテロープ・ワイフ』は、アードリックの第6作目の長編小説であり、それまでの小説において様々な時代や人物設定が試行錯誤された後にもう一度⁶、先住民とヨーロッパ移民との関係性の歴史と、現代の先住民の生活、それに恋愛物語を統合させた作品である。現代の都市における先住民の多文化的な状況と先住民女性の自由な移動を描く点において、特に興味深い作品だ。

『アンテロープ・ワイフ』において注目できるのは、消費主義と多文化主義の影響にあるアメリカの現代の都市における先住民の姿であるだろう。『アンテロープ・ワイフ』に描かれる登場人物たちの関心は現代的なものであり、血筋においても、家族構成においても、毎日の習慣や日常品においても、非常に多文化的な要素が見られる。登場人物たちは複数のアイデンティティを持ち、異文化の人々と交流し、他文化の生活スタイルを取り入れてお

り、それらの多文化は大きな葛藤をもたらすことなく、驚くほど簡単に受容され、合わさり、消費され、切り売りされている⁷。例えば、ロジーナは、オジブワの家族と、白人騎兵、アイヴォリー・コーストの奴隷、フランス公爵の孫 (AW 34-35) に自らの祖先を認め、キャリアもまた、オジブワとフランス、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、モン、アイルランドの人々との自らの関わり (AW 110) を説明している。カンフーのスタジオを経営するアイルランド系アニシナベのセシルは、ルートビアと豆腐ウィンナー、チリピーンズ、コーンとレーズンのサラダ (AW 116) を食べており、キャリアの壁には、セージの束と、ロイおばあちゃんのドラム、犬のポスター、ジミー・ヘンドリックスとインディゴ・ガールズ、先住民バンドのインディジェナスの写真 (AW 103) が一緒に張られ、リチャードは、ハラキリで死ぬか、カミカゼ的に死ぬかを迷い (AW 176-77)、クラウスは亀の彫刻やモカシン、羽根、ナバホのトルコ石などを観光客に売り (AW 22)、祖母のメアリーとゾジーは大学でネイティヴ・スタディーズの講演を行っている (AW 108) などといったように。

『アンテロープ・ワイフ』において、列挙される国や民族の名前は数多く、これらの状況は現実に、人々や文化の無数の移動を反映した現代アメリカの一部の様相を確かに語っていると思われる。アードリックは、決して否定的な描写を行っておらず、この「文化融合」の記述に、「人々の生への肯定的な」意味あいを読みとる論者もいる (Little 507; 499)。しかし一方で、これらの文化融合の状況は、現代アメリカの肯定的な諸相を語っていながら、その表面性や非政治性、消費主義優先の事実をも明らかにしているようだ。実際に、『アンテロープ・ワイフ』の中では、消費主義の昂じた社会において放出される大量のゴミと、第三世界の森林破壊や、低賃金労働を基盤とする不均衡な経済システムに対する批判が込められ、大地や自然と強く結び付き、環境保護のシンボルとしてしばしば祭り上げられるインディアンが、ここでは皮肉にも、消費主義の弊害をも抱える現代北アメリカ社会の一員である現実を指摘している。その意味で、クラウスとリチャードの2人の先住民がゴミ

処理業者として作品に登場することも、興味深いといえるだろう。

『アンテロープ・ワイフ』では、忙しい都市生活が登場人物たちのせわしない動きによって描写される。フランクの家には誰もおらず (AW 106)、セシルは絶えず跳ね回り (AW 118)、ロジーナは絶えず引っ越しをし、キャリアは、臍の緒を入れたお守りを失って以来「家」からさまよい始め (AW 101)、祖母たちは、お葬式やビンゴや講演に忙しく動き回り、訪ねてもいたためしがない (AW 108) というように。

『アンテロープ・ワイフ』で描かれるもうひとつの移動は、先住民の、特に女性の登場人物たちの歩き続ける (= 生き続ける) 力や、自由さを語るものとして描かれているようだ。アードリックは、他の小説においても女性の家庭からの逃避を描くが³⁸、『アンテロープ・ワイフ』においても、女性の登場人物たちは常に動いており、娘、妻、母、祖母としての役割から自由であろうとする姿が描かれるようだ。象徴的であるのは、伝説として語られるブルー・プレーリー・ウーマンと、その娘のマチルダ、そしてアンテロープ・ワイフ (スートハート・キャリコ) が歩き続ける描写である。アンテロープ・ワイフの本来の移動への意思は、レイヨウのような「軽快な、疲れ知らずの脚 (AW 23)」と描写されることによって示されるが、クラウドの愛情によって捕えられ、都会のホテルの一室に閉じ込められた彼女の姿は、家庭に閉じ込められて絶望する主婦のように、TV を見続け、ソープ・オペラの女優を真似して着飾り、ヒステリックに笑い、一日中泣き、酔っ払い、気分屋になり、過食で太るというような姿が描かれる。外の世界との通信を求めようとする様子は、決して通じない電話をかけ続ける行為に示され (AW 31-32)、アンテロープ・ワイフの幾たびかの歩く試みを経て (AW 218-19)、最後にクラウドの後押しを経て完成される。伝説世界と現実世界との狭間に存在するアンテロープ・ワイフを描くことで、アードリックは、都市における現代の先住民の不安定なせわしない動きと、先住民、特に女性の本来の自由な動きとの両方とを描き出しているのだろう。

VI 移動の概念と家郷

最後に、移動を描く先住民作家たちが問題にする、帰属の場としての「家郷（ホーム）」の概念と、そのような帰る場所の不在、「家郷のない（ホームレス）」状況を考察しておきたい。

都市で生まれ、親類や養父母の元を転々として育ったヴィズナーがかつて米兵として日本を離れる際の手記に、次のような一文が織り込まれている。

私は家に帰ろうとしていた。だが、家というものはなかったのだ。当時、私にとって
はどの家も本当のものではなかった。故郷というノスタルジアではなく、共にあるこ
とを強く望むような場がなかったのだ。 (Vizenor 1990, 148)

帰国の途にありながら、帰る場所を持たないヴィズナー自身の「家郷のない」状況は、これまで見てきたような移動性の高い彼の作品の数々に反映されているが、先に挙げた『ベアハート』において、先祖来の森を焼き払われ、家を失うブルードの姿は、土地を追われ、「家郷のない」状況を余儀なくされた先住民を象徴するものであるだろう。『悼む者』では、主人公グリーバーが中国における余所者であることが示されるが、彼が同時に都会育ちの混血であり、言葉を持たないために「居留地においてさえも余所者である」(Griever 42) こと、『アンテロープ・ワイフ』においては、現代の都市の先住民が示す場所の定まらない「家郷をもたない」側面が、とりわけ文字通りホームレスに転じたクラウドとリチャードに典型的に表わされる。

それでは、先住民にとっての「家郷」とは何であるのだろうか。先住民文学において、居留地はしばしば二重の意味合いをもって描かれており、「家郷」の概念を捉えるにあたって興味深い場であるようだ。政府によって指定され、割り当てられた土地は、必ずしも先住民の生活基盤に即したのではなく、しばしば不毛な隔離された場所にあり、現在もなお貧困やアルコール中毒の深刻さが依然として残されているのが現状だ。居留地を舞台とする作品の多くは、居留地における問題の深刻さや、「何もない」(cf. *Love Medicine*

45) 場所として居留地を描いており、居留地を逃れ、憧れる外の世界へ行こうとする逃亡願望もしばしば明らかにされる⁹⁾。しかし、妥協や消極的な選択であったとしても、「帰る」場所として登場人物たちに認識され、あるいは実際に帰ることはなくとも、精神的な帰属の場や作家たちの発言の拠点として、しばしば位置付けられるのも居留地であることは注目に値する。居留地は、人々が何とか交渉し、生き続け、作り上げてきた場として、書き直され、再位置づけされているといえるのではないだろうか。『アンテロープ・ワイフ』には、ノルウェー人、スウェーデン人、インディアンそれぞれの野犬保護員たちのブラック・ジョークが挿入されるが、トラックの鍵が開いたままになっていても決して逃げ出さなかったインディアンの犬について、次のような会話が交わされる。

「ああ。」とオジブワがいった。「俺の犬はインディアン犬なんだよ。奴らにとっちゃ、どこにいたって、居留地みたいなものなんだ。誰かが逃げ出そうとしたって、他の奴らが足を引っ張るだろ。」

「その冗談はいただけないな。」とクラウスがいった。「居留地は俺にとっては特別なんだ。心のよりどころみたいなものだ。」
(AW 224)

ここには、居留地の持つ2つの側面が描かれており、「どこにいても居留地と変わらない」とする現実的な厳しい状況への皮肉と、「特別な」「心の規範となる」ような場所だとする居留地の意味の再位置づけを同時に読むことができるだろう。

ルイス・オーウェンスは、彼の家族が「ネイション」(Owens 1998 150) と呼んでいた、オクラホマ州のインディアン・テリトリーについて語り、そこが、「強制移住の脅威が終わった後、独立戦争の脅威が訪れる前の、非常に愛された家」(Owens 1998 164) であったとしている。「涙の道」と称された19世紀初頭の強制移住によって集められ、歴史的に固定された「場」としてのインディアン・テリトリーは、先住民の人々のもつ両面価値によって書き

直されてきた「場」として捉えることができるだろう。

ママディにとってのデヴィルズ・タワー（ツォアイタリ）、シルコウにとってのラゲーナ・プエブロの風景、ウェルチにとってのロッキー・ボーイズなど、先住民の物語や記憶に残る風景が、距離や時間を経ても、特別な「場」として認識される風景を先住民文学は描いている。その一方で、次世代の先住民文学は、変化しつつある都市や、グローバルな世界における新たな「場」への認識の変化を描き、ステレオタイプのな荒野や草原への固定化を逃れ、移動の歴史を経て築き上げられて来た「場」を自らの「場」として捉え直すような先住民の現在をも描いてきたといえるだろう。

本論文は、2005年10月15日に、北海学園大学で行われた、日本アメリカ文学会第44回全国大会における研究発表に加筆修正を施したものである。司会の荒このみ氏をはじめ、助言をいただいた方々にこの場をお借りして感謝の意を表したい。

注

- 1 cf. Homi Bhabha, *Location of Culture*; James Clifford, "Traveling Cultures"; James Clifford, *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*; Caren Kaplan, *Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*; Edward Said, "Traveling Theory"; bell hooks, "Representations of Whiteness in the Black Imagination"; etc. なお、クリフォードは、自らが選んで使う「旅 (travel)」という言葉がもちうるブルジョワ性を指摘しており、フックスもアフリカン・アメリカンの体験を表すのに、“travel”ではなく“journey”という表現に置き換えるが、本稿がアメリカ先住民たちの余儀なく強いられた移動ばかりでなく、現代の選択的な移動も扱う点において、敢えて“travel”という表現を選択した。
- 2 ヴィズナーは、別のインタビューにおいて、ペリー監督が黒船で横浜に来航する以前の1848年に、アメリカ先住民チヌークのラナルド・マクドナルドが日本に漂着し、アイヌに助けられたことを指摘している（『すばる』）。
- 3 cf. Barraza.
- 4 シャーマン・アレクシーの『スモーク・シグナルズ』（*Smoke Signals*, 1997）に登場するスージー・ソングは、ニューヨーク出身の中国人とモホークの混血であるとされ、病

院勤務の彼女が各地を転々としてきたと語る場面は、ステレオタイプに反した現代の先住民の一人の人の姿を描く。

- 5 例えば、グリーバーは、中国の老婆の姿に自分の祖母の姿を思い (Griever 41)、石を割るシャーマンの存在に居留地のシャーマンの姿を思い浮かべる (Griever 74)。
- 6 『アンテロープ・ワイフ』(1998) に先立ち、アードリックは、『ラヴ・メディシン』(Love Medicine, 1984)、『トラックス』(Tracks, 1986)、『ビンゴ・パレス』(The Bingo Palace, 1994) においてノースダコタ州のチペワ居留地を舞台とする先住民の物語を描いた。『ビート・クイーン』(The Beet Queen, 1986) では、父方の家族の物語に光をあて、近隣の町のドイツ系移民を描いている。手を加えて再出版された『ラヴ・メディシン』(1993) の増版は、初版よりも、先住民の言語や文化に関する言及が増えている。一方、『5人の妻を愛した男』(Tales of Burning Love, 1996) では、自らの先住民性にほとんど関心のない都市の先住民の姿を描き、先住民の要素がほとんど削除されている。
- 7 作品のこうした側面に対しては、特に歴史的な経緯や、作中のオジブワ語、ドイツ語、伝承の挿入についての安易さを批判する声もある (Treuher)。
- 8 cf. 『ラヴ・メディシン』におけるジューン、『ビート・クイーン』におけるアデレード、『トラックス』におけるフルーなど。
- 9 cf. トムソン・ハイウェイ (Tomson Highway, 1951) の『居留地姉妹』(The Rez Sisters) における「トロントに行きたい」(2) とするベレイジアの繰り返しの要求、ルイーズ・アードリックの『ラヴ・メディシン』における複数の登場人物たちの都市への逃避行動などに例を見ることができる。

参考文献

- Alexie, Sherman. *Smoke Signals*. Film. 1997. Screenplay. New York: Hyperion, 1998.
- Barraza, Santa Contreras. "Art Talk: Border Crossings/Looking South." A Lecture at the Smithsonian National Museum of the American Indian, New York, NY, July 18, 1997.
- Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. London: Routledge, 1994.
- Clifford, James. "Traveling Cultures." Grossberg, Lawrence, Cary Nelson and Paula A. Treichler eds. *Cultural Studies*. New York: Routledge, 1992.
- . *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1997.
- Erdrich, Louise. *The Antelope Wife*. New York: Harper, 1998.

- . *The Beet Queen*. New York: Henry Holt, 1986. New York: Bantam, 1989.
- . *The Bingo Palace*. 1994. New York: Harper, 1995.
- . *Love Medicine*. 1984. Expanded Edition. New York: Harper, 1993.
- . *Tales of Burning Love*. New York: Harper, 1996.
- . *Tracks*. 1988. New York: Harper, 1989.
- Highway, Tomson. *The Rez Sisters*. First produced at National Canadian Centre, Toronto, Ontario, 1986. Calgary: Fifth House, 1988.
- hooks, bell. "Representations of Whiteness in the Black Imagination." *Killing Rage: Ending Racism*. New York: Henry Holt, 1995.
- Kaplan, Caren. *Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*. Durham: Duke UP, 1996.
- Kaye, Fran, Franci Washburn, Martha A. Bartter, and Miriam Schacht. "Travel and/as Tradition." The Native American Literature Symposium at Prior Lake, Minnesota, 2005.
- Krupat, Arnold. *The Turn to the Native: Studies in Criticism & Culture*. Lincoln: U of Nebraska P, 1996.
- Little, Jonathan. "Beading the Multicultural World: Louise Erdrich's *The Antelope Wife* and the Sacred Metaphysic." *Contemporary Literature* 41.3 (2000)
- Lowe, John. "Monkey Kings and Mojo: Postmodern Ethnic Humor in Kingston, Reed, and Vizenor." *MELUS* 21.4 (1996)
- Momaday, N. Scott. *House Made of Dawn*. New York: Perennial, 1989.
- . *The Way to Rainy Mountain*. Albuquerque: U of New Mexico P, 1969.
- Neihardt, John G. *Black Elk Speaks*. 1932. Lincoln: U of Nebraska P, 1988.
- Owens, Louis. "Louis Owens." *Contemporary Authors: Autobiography Series. Vol. 24*. New York: Gale Research, 1996.
- . *Mixedblood Messages: Literature, Film, Family, Place*. Norman: U of Oklahoma P, 1998.
- Rigal-Cellard, Bernadette. "Vizenor's Griever: A Post-Modernist Little Red Book of Cocks, Tricksters, and Colonists." *New Voices in Native American Literary Criticism*. Arnold Krupat ed. Washington: Smithsonian Institution P, 1993.
- Said, Edward. "Traveling Theory" *Culture and Imperialism*. New York: Vintage, 1994.
- Silko, Leslie Marmon. *Almanac of the Dead: A Novel*. 1991. New York: Penguin, 1992.
- . *Ceremony*. 1977. New York: Penguin, 1986.

- Treuer, David. "Reading Culture." *Studies in American Indian Literatures* 14.1 (2002)
- Vizenor, Gerald. *Darkness in Saint Louis Bearheart*. 1978. Rpt. as *Bearheart: The Heirship Chronicles*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1990.
- . *Fugitive Poses: Native American Indian Scenes of Absence and Presence*. Lincoln: U of Nebraska Press, 1998.
- . *Griever: An American Monkey King in China*. New York: Illinois State University, 1987.
- . *The Heirs of Columbus*. Hanover: Wesleyan UP, 1991.
- . *Hiroshima Bugi: Atomu 57*. Lincoln: U of Nebraska P, 2003.
- . *Interior Landscapes: Autobiographical Myths and Metaphors*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1990.
- . *Manifest Manners: Postindian Warriors of Survivance*. Hanover: Wesleyan UP, 1994.
- . Interview. 巽孝之「ジェラルド・ヴィセナー」『すばる』2005.1
- and A. Robert Lee. *Postindian Conversations*. Lincoln: U of Nebraska P, 1999.
- Welch, James. *Winter in the Blood*. 1974. New York: Penguin, 1986.

